



#### インタビュー

キャンパス全体でボーダレス化を図り  
日本人学生にも留学生にも  
刺激的で快適なKITを創造

#### 研究室だより

学生教育から見た国際交流

#### 季節のたより

京の春夏点描

#### 人物往来

京都ーカイロ、日本ーエジプト 未来への対談  
すべての意味

#### トピックス

学長主催による外国人留学生と学内外関係者との交流会  
外国人留学生実地見学旅行

京都工芸繊維大学  
国際交流センター

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町1番地  
Tel:+81-75-724-7128 Fax:+81-75-724-7710  
E-mail:ab7129c@jim.kit.ac.jp/  
[http://www.cis.kit.ac.jp/~gaku\\_k/japanese/index.html](http://www.cis.kit.ac.jp/~gaku_k/japanese/index.html)  
<http://www.kit.ac.jp/>

禁無断転載

京都工芸繊維大学



国際交流副センター長・副学長

## 古山正雄

# キャンパス全体で ボーダレス化を図り 日本人学生にも留学生にも 刺激的で快適なKITを創造

二〇〇六年四月、本学は開学以来の大々的な改組再編を行います。一昨年の十一月に制定した大学の理念にうたわれた「知(科学)と美(造形)と技(工学)の探求」を前面に打ち出し、学部と博士前期課程の一貫した六年間の教育を視野に入れたなかで、国際的に活躍できる高度専門技術者の育成を目指していきます。言うまでもなく、世界各国からの留学生の皆さんも本学の一員として、今まで以上に質の高い能力をKITで養ってほしいと熱望しています。

この改組再編に先立ち、本学では昨年より「国際基幹技術者養成教育プログラム」を推進しています。これは海外の提携校へ学生を派遣し、現地で応用力や実践的コミュニケーション能力を養成するというプログラムですが、本学では学生のみなならず、教員や職員も積極的に国際交流に取り組みよう心がけています。なぜならキャンパス全体で、ボーダレス化を図ることによって初めて真の国際化が実現し、それが日本人学生にも、

ひいては留学生にも刺激的で快適なKITの創造に繋がると考えているからです。

ボーダレス化、計画の重要な一環として、カリキュラム構成の改革も挙げることでできます。実践的な語学教育のために、ネイティブの教員による英語の授業を充実させたほか、今後利用の拡大が予想される中国語の講座も従来の二倍近くに増やしました。また、TOEFLやTOEICの試験成績を単位として認定したり、大学院入試に活用できるようにするなど語学に関する新しいチャレンジを多彩に繰り広げています。

一方、本学では京都の伝統産業や文化のなかに埋もれている暗黙知を科学的に分析し、顕在化する異分野リテラシーにも力を入れていきます。留学生の皆さんは世界にも稀に見る古都で学んでいるのですから、ぜひとも京都で学んでいけない学修に挑戦してほしいと思います。

教育以外の取り組みでは、夏と冬に交流パーティーを開き、日本人学生と留学生との交流の機会を提供しています。毎年二月には留学生の出身国の駐日領事と指導教員及び日本人学生等を招いて、学長主催による本学留学生との交流会を開催しています。また、工場や文化施設の見学を通して日本理解の促進を図る外国人留学生実施見学旅行も、留学生から好評を博している行事の一つです。

さて、最後にお願いをしたいことがあります。本学留学生の現地OB・OG会が多数あると耳にしますが、詳しい情報がなかなか入ってきません。もし会員の方がこれを読んでいらっしやれば、その活

動内容などについて教えていただければ幸いです。そして、会合の予定があればぜひご連絡ください。参加したいという教員がたくさんいるのです。私自身も、今後KITのネットワークが国境を超えてどんどん広がっていけば、と心より願っています。



2005年12月 留学生パーティにて



2005年8月 見学旅行風景



# 学生教育から見た国際交流

工学部機械システム工学科  
輸送現象制御工学研究室教授

萩原 良道



私どもの研究室は、機械システム工学のなかで主に省エネルギーを目的とした輸送現象の制御学に取り組んでいます。環境保全の観点からも、今後その重要性がさらに増すと考えられるエネルギーの有効利用に向けて、二十名の学部生・院生が「マイクロバブルによる熱伝達の促進」「新しい熱交換器の開発」「高分子添加による水流摩擦低減メカニズムの解明」「イルカの摩擦抵抗メカニズムの解明」といった研究に打ち込んでいます。

研究室のメンバーのなかには現在、二人の留学生がいます。一人は中国から来た学部四年生、もう一人はタイ出身の大学院二年生です。中国人学部生の日本語力は相当なものです。タイ人院生は日本語と英語の両方でコミュニケーションを行っています。そんな彼に、私は英語だけで話しかけ、彼も英語で答えます。



研究室の風景

「日本語を習得させる意味でも日本語で教えるべきでは」と思われるかもしれませんが、私は日本人学生と留学生の区別なく、英語力を高めるよう指導しています。というのも機械工学の先進国は欧米諸国であり、研究にも分析を重んじる欧米的なスタイルや発想が求められます。そのためにはやはり、研究の根幹となる

英語力が不可欠なのです。また、大学院生には、国際会議に出席し、英語で研究発表を行うことを勧めています。ゆえに私どもの研究室では、日々のコミュニケーションやティスカッションの場において英語を使うよう心がけているのです。

英語力や国際的な感覚を養うには、自ら海外へ飛び出そうとする行動力も大切です。私どもの研究室にも、現在アメリカの大学院で研鑽を重ねている者がいます。私自身も海外留学を経験しており、それを踏まえて留学希望者にアドバイスしているのは、事前準備を万端にしておくということ。今日のようなインターネット社会であれば、研究内容についての情報や論文リストなども入手しやすいでしょうし、努力次第では先方と直接コンタクトが取れるかもしれません。見知らぬ地で長期間暮らすわけですから、

生活文化や習慣についてもしっかりと理解しておく必要があります。可能であれば留学前にいっと現地を訪れ「免疫」をつけておくのもいいでしょう。これらのことは、海外から日本への留学希望者についても同様に言えることです。

今後も、私どもの研究室では積極的に留学生を受け入れるとともに、日本人学生を海外の大学へ送り出したいと考えています。そしていつの日か、彼らが互いに切磋琢磨を重ねるなかで新たな発見を成し遂げ、それを世界に広げてくれることを期待しています。

# 京の春夏秋冬点描



鴨川の水がぬるみ、東山が露に霞む頃、京都に待ちわびた春がやってきます。大路小路のあちらこちらでは底冷えを耐えた蕾が開き、静かな街並みがほんのりと華やきます。色とりどりの花の彩りが移りゆき、木々の緑が輝きはじめると季節は初夏に。そして梅雨が過ぎ、街に祇園囃子が鳴り響けば、本格的な夏のはじまりです。

京都の春は花にはじまり、花に終わるといっても過言ではありません。酸郁とした梅の香りが東風につれて過ぎ去ると、匂い立つのは桜の色香。哲学の道、平安神宮、醍醐寺、御室、嵐山などの桜の名所は、今を盛りと咲き誇る花の輝きを愛でようとする多くの人で賑わいます。桜の彩りを継ぐように咲き競うのが躑躅や牡丹。そして五月の薫る風に吹かれて躑躅や藤が可憐な花をつけ、水辺の杜若が開く頃、四方の山はみずみずしい新緑に輝きます。

紫陽花の季節とともに訪れる梅雨。秋の実りへと稲を育む恵みの雨が別れを告げ、真夏の陽射しが石畳の路地を照らすと祇園祭のはじまりです。コンチキチンの祇園囃子にのせて、絢爛豪華な山鉾が行き交う祭りは京都の夏を代表する行事。それから約一月、御所の杜に蝉時雨がこだまするあいだ、大路小路は厳しい暑さに見舞われます。そしてお盆の八月十五日、五山の送り火が夜空を焦がすと、古都の夏はクライマックスを迎えます。





## 京都—カイロ 日本—エジプト 未来への対談

エジプト大使館文化担当アタッシェ  
アハメッド・エルサルマウィ



「金のちようつが  
いの記憶の扉が開か  
れると、そこには古  
き良きものにつつま  
れた庭が広がり、私  
の心が歩き出す。」

私は今、心穏やかに安らげる京都での幸せな思い出に浸っています。私にとって京都は、最初に人生目標の一つ目の種がまかれ、粘り強さ、忍耐、献身、そして努力という名の水を与えられて花開いた、まさに特別な実りの

## すべての意味

大学院工芸科学研究科博士後期課程機能科学専攻

林 焯希



感じられる時がある。そして、人間の力では逆らえない道歩んでいるような気がする。

日本との縁を結んだのはもう十年前のことである。その時、私は韓国の大学を休学して

すべてのことはす  
でにここに至るま  
での旅程だったか  
もしれない。たまに、  
そのすべてが決めら  
れた芝居のように

土地なのです。もちろん、丈夫な植物が育つには肥沃な土壌が必要です。そしてその土壌とは、ご指導いただいた木村教授からの手厚いサポートやご配慮にほかなりません。木村教授はいつも私の身近にいてくださいました。私の努力を支持し、成功を認め、研究への専念を励ましてくださいました。木村教授のご支援があったことで、数々の困難は軽減され、克服できたのだと思います。木村教授が後ろから見守っていてくださることが、私や私の家族の結びつきの強さや自信となりました。

私の心のオアシス、京都。私が人生において大切な様々な目標を達成していくステップを見守ってくれた土地です。人生は平坦な道や歩きやすい道路ばかりが続くものではありません。しかし、努力すれば岩だらけの山道も登りきることができると、勇気を出せ

京都大学の建築学科の研究生として一年間留学をしていた。予定していた期間がすいぶん過ぎた頃、偶然とも京都工芸繊維大学の人々と知り合った。韓国では知られていなかった工織大の存在を感じる経験をし、自由な発想で情熱的な人々に強い印象を受けた。でも、その時までもまさか私が工織大と深い縁になるとは思わなかった。

その後、韓国に帰った私は社会人として大学で非常勤をしながらデザインの仕事をしました。優れた研究が蓄積されている日本の留学は、デザインという分野のなかで研究と実務を新しい目線で読み取る肥やしになった。特に、個人的にはずっと一生の課題である日

ほどんなに高い山の頂上にもたどりつくことができるのです。障害になりそうなものがあれば、逆にそれを次への踏み台にしてしまえばいいのです。そのような静く思い出は人々の精神を育て、知識を養い、心を刺激するのです。そして私は昔の思い出を思い返し、次の未知なる目標へとつながる橋へ導かれるのです。その目標とは、京都とカイロの間に強く大きな橋を架けることです。私の心に強く残る言葉に、「夢見るところからすべては始まる」と「自信を持って夢に向かって進み、努力をすれば、必ず成功する」というものがあります。常に夢を心に抱いていれば、必ずかなうと信じています。

文化担当アタッシェとして、そしてまたエジプト政府を代表する者として、KITとエジプトの大学間において、あらゆる相互的な学術交流関係を構築し、推進できるような強

本的なものと韓国的なものとの境界を明確にすることが人生の宿題のように私の側から離れなくなりました。結局、宿題を片付けるために再び留学を決めました。その疑問が解ける環境を思い描いた時に工織大が浮かび上がったのである。それまでの長い旅程は今の所になどり着くために存在したことのように自分には感じられている。

必然だと思ふ幾つかの理由がある。学問的な環境は勿論のことであるが、一番大切な要因として人的環境が挙げられる。私は人生を変えたい一生忘れられない人々に工織大で出会った。まず、私のつまらない疑問を理解してくださる恩師との出会いが出来たことである。

固な基礎を築くという強い意志を持っている。カイロでの初めての日本の大学「エジプト—日本科学技術大学（EJUST）」がまさに産声をあげようとしています。現在、有益な相互関係を構築発展させるためのしつかりしたかけ橋を作るべく、最後の段階に入っています。そのために必要なことは何でも協力して行い、特にKITとの交流を促進できるように、惜しみなく努力したいと思っています。

最後に、私の心からの感謝の意を次の方々へ申し上げます。鹿児島大学の村岡雅一郎教授、京都大学の岩田博夫教授、そして、いつも穏やかで思いやりにあふれる京都工芸繊維大学国際企画課長の吉井勉氏。誠にありがとうございました。

それでは、みなさん、カイロのEJUSTで会いましょう！

それから人間の美しい心を学校の方々から何回もいただいたことがある。恥ずかしながら、学位論文だけを残している今の自分にとって、学位より大切なのは感銘的な人々との出会いであって、それが私の日本での留学の意味だと思っている。勉強は一人でも頑張りば出来るかもしれないが、その場、その時、その人の心と気持ちは私の人生を変える波紋を投げた。その波紋は国へ帰っても余韻を残し一生の静かなしかなし忘れられないエネルギーになると信じている。今の私は恥ずかしい。いつももらったものばかりであった。これからは私もそうになりたい。

## 学長主催による 外国人留学生と学内外関係者との交流会

2006年2月22日午後6時から、京都市のホテル日航プリンスで、「京都工芸繊維大学学長主催による外国人留学生と学内外関係者との交流会」が開催されました。出席者は、Stefano ZANINI駐大阪イタリア共和国総領事を始めとして、在日外国公館、京都府・京都市等の行政機関、奨学財団及び支援組織などからの来賓17名、外国人留学生111名、国際訪問研究員5名、日本人学生18名、本学教職員52名の合計203名でした。開会挨拶において、江島義道学長から、外国人留学生へ多大の御支援を頂いている来賓への謝辞、外国人留学生に対する激励などが述べられた後、来賓を代表して駐大阪イタリア総領事より御挨拶があり、功刀滋副学長・国際交流センター長の音頭により乾杯の後、出席者はそれぞれに親しく懇談・交流しました。また、インドネシアの外国人留学生によるバリダンス、ベトナム、マレーシア、中国のそれぞれの留学生による歌などの披露に盛んな拍手が寄せられ、2時間の交流会は、盛会のうちに古山正雄副学長の挨拶により閉会されました。

平成17年度 京都工芸繊維大学学長主催による  
留学生と学内外関係者との交流会



## 外国人留学生実地見学旅行

2006年2月28日に外国人留学生実地見学旅行が開催されました。バスでの日帰りの旅行で、朝8時30分に出発して夕方7時に帰着するというハードスケジュールでしたが、参加者全員から満足したという感想が聞かれました。参加したのは、ベトナムからの Nguyen, Viet Thangさんを始めとする外国人留学生20名と日本人学生4名の合計24名、同行したのは芝田氏、岩佐氏、長竹氏の国際企画課のスタッフ3名でした。

見学先は、三重県の株式会社 森精機製作所と滋賀県の信楽陶芸村の二カ所。株式会社 森精機製作所は、自動車や航空機部品などを製作するための精密工作機械のメーカーとして、世界的に活躍している会社です。また、信楽陶芸村では、前身校以来の本学の卒業生が発展に永らく貢献してきた信楽焼の製造産地を訪ねて、窯業から先端セラミックス技術に至る産業技術発展過程と日本の伝統文化について体感しました。参加した学生は、専門分野はそれぞれ異なるものの、大学での学修が直接反映される生産現場を見学し、日本伝統文化に触れたことで、それぞれの学修へのモチベーションが高められたようです。



### 国際学術交流クラブについて

このクラブは、本学の卒業及び在学外国人留学生、元・現国際訪問研究員、学術交流協定校の教職員など多くの方々により組織されている世界的なネットワークで、本学が国際社会の学術的な発展と科学技術の振興に貢献するための一翼を担うことを目的としています。

入会のお申し込みについての詳細は、本学の国際企画課ホームページを御覧ください。

[http://www.cis.kit.ac.jp/~gaku\\_k/japanese/index.html](http://www.cis.kit.ac.jp/~gaku_k/japanese/index.html)



### 国際企画課

国際企画課は、国際交流センターに関するすべての事務を担当しております。皆様からのご連絡を課一同お待ちしております。